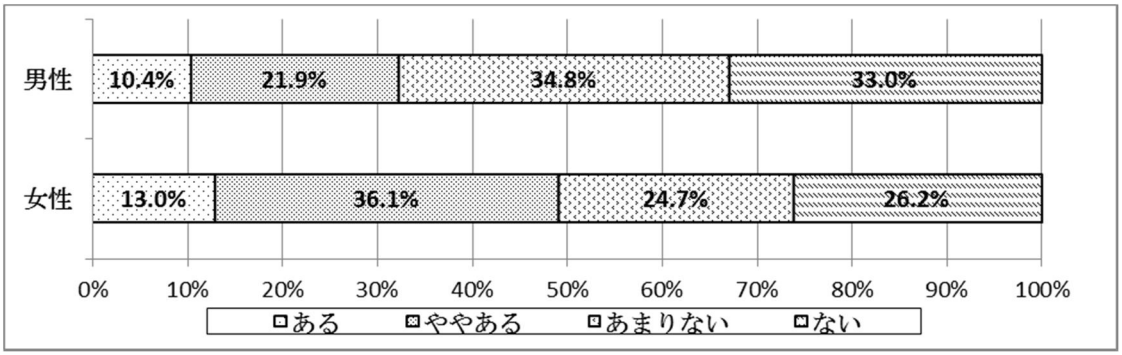
2015 年 3 月 31 日
特定非営利活動法人「老いの工学研究所」

高齢女性の半数、男性では 3 人に 1 人が、住まいに不満や不安
健常高齢者が満足できる住まいが、不足。
住まいへの不満「維持管理が大変」「段差」「耐震性」。「利便性」は重視せず。

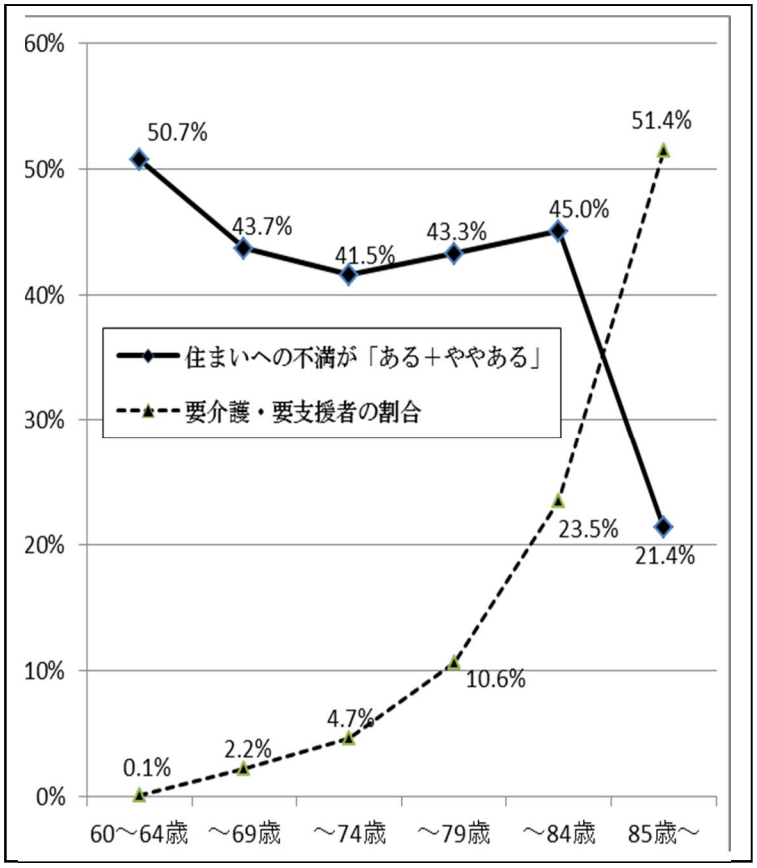
高齢期のライフスタイルの充実について研究・提言する、特定非営利活動法人「老いの工学研究所」（大阪市中央区、理事長：西澤一二。http://oikohken.or.jp/）は、高齢者の住まいに対する不安や不満についてアンケート調査を実施し、６０～９７歳まで６６３名から回答を得ました。その結果がまとまりましたので、お知らせ致します。

１．高齢女性の半数、男性では 3 人に 1 人が、住まいに不満や不安を持つ。

「現在の住まいについて、不満や不安はありますか？」という質問に対して、「ある」「ややある」と回答した人の割合は、男性 32.3%、女性 49.1%となりました。



２．健常高齢者が満足できる住宅が不足している



年代別には、80 歳代の前半まで４～５割の人が住まいに不満・不安を抱えていることが分かります。また要介護・要支援の認定を受けている人の割合（点線）は、60 歳代後半で約５%、70 歳代後半で約 10%、80 歳代前半で約 23%となっています。

これらから、要介護・要支援の状態にはない、自立した元気な高齢者の半数近くが、住まいに満足できない状態であることが伺えます。

要介護者を対象とした“施設”の整備が話題になりますが、健康で充実した高齢期を実現するには、むしろ健常高齢者向けの“住宅”不足を解消すべきであると考えられます。

要介護・要支援者の割合は、「介護給付費実態調査月報／平成 26 年 7 月（厚生労働省）」と、「人口推計月報／平成 26 年 7 月（総務省）」から作成。

３．具体的な不満・不安の内容

住まいの不満・不安の内容は、以下の通りとなりました。（上位 10 項目。自由記述方式）

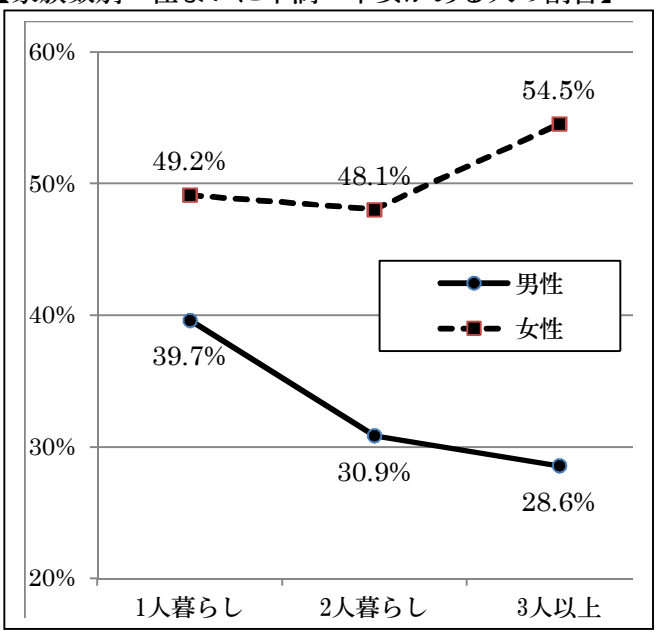
1	管理が大変（広すぎる・老朽化）	59.6%
2	段差・階段がある（室内）	36.9%
3	地震・災害が心配	24.1%
4	寒い（日照や密閉性がない）	13.5%
5	坂道が多い（周辺）	5.0%
6	病院が遠い	4.3%
7	買い物が不便	4.3%
8	狭い	3.5%
9	防犯面が不安	2.8%
10	駅が遠い	2.8%

上位には維持管理・仕様・耐震性といった住宅そのものに関することが並び、いわゆるファミリー層が重視する「利便性」は、いずれも 3～4%程度に留まりました。

身体的な衰えや、家族やライフスタイルの変化に伴って、住まいに求める条件が変わるのは当然と言えますが、多くの高齢者がそのような生活環境の変化にマッチしていない住宅に住み続けている状況が伺える結果となりました。

４．高齢男性は「家族と住むこと」、女性は「住宅の性能」を重視。

【家族数別・住まいに不満・不安がある人の割合】



同居する家族数別に、「住まいに不満・不安がある」と回答した人の割合をみると、男女で明確な違いが見られました。

男性は、家族数が多いほど 住まいに不満を持つ人が減っており、家の広さや性能よりも、家事をやってくれる人がいる、会話があるといったことを重視しているように感じられます。

女性では逆に、家族数 3 人以上で住まいに不満を持つ人が増えており、これまで子らと住んできた家の広さや性能に不満を覚えるようになるのではないかと考えられます。

【まとめ】

政府は「“日本版 CCRC” を構想するための有識者会議」を立ち上げ、高齢者の住み替えに関する議論を始めましたが、今回の調査では、健常高齢者が満足できる住宅が不足しているため、要介護状態になるまで、不満があっても我慢して住み続けている現状が浮かび上がりました。住み替え促進のためには、健常高齢者に合った住宅の供給・整備を進めることが急務であると考えられます。

（CCRC は、継続的なケア付きのリタイアメントコミュニティー。老後、まだ健康なうちに入居し、各々の必要に応じて住み替え等をしながら、最期の時までを過ごす高齢者向けの生活共同体。）

※調査概要

調査期間：2014 年 12 月 18 日～2015 年 2 月 18 日
調査方法：郵送
回答者　：663 名（男性 270 名／女性 393 名）

60 歳代	70 歳代	80 歳代以上
193 名	283 名	187 名

＜本リリースに関する お問い合せ先＞
特定非営利活動法人「老いの工学研究所」
大阪市中央区伏見町四丁目 2 番 14 号
研究員　川口 雅裕
06-6223-0001、info@oikohken.or.jp